

I はじめに

『沿革史資料番外メモ』の項目の多くは、往復文書綴にファイルされた文書を、主要な材料としてまとめた。巻頭の節【I-1 往復文書綴 -まえがきに代えて-】では、往復文書綴の内容や、時代にもなう変化を説明し、筆者が古い時代の往復文書に興味を感じ、それを材料に『メモ』を作った経緯を述べた。

千葉演習林（千演）では種々の事情から、これまで独自の沿革史をまとめる機会を逃した。しかし、古くから刊行されてきた『概要』や『視察案内』などが、『メモ』をまとめるのに非常に役立った。それらを【I-2 千葉演習林案内資料 -これまで印刷配布された概要、視察案内、地図など、全般的な資料のリスト-】にあげ、一部について説明を付けた。

ところで、現在使われている『千葉演習林』の名称にいたるまでには、沿革史資料(1)にあるように種々の経緯があった。このことを【I-3 公印に見る千葉演習林名の変遷】でふれた。千演創設時、演習林は他になく、派出所印に演習林名は不要だった。北海道（1899年）や台湾（1902年）に演習林ができると区別が必要となるが、『千葉縣演習林』名の公印はかなりあとの1911年に作られた。

なお千演初期の、区域が旧清澄官林だけの時代には、『清澄演習林』の名称が使われた。のちに奥山官林などが編入されると、この新区域には『奥山演習林』の名称が与えられる。そして清澄、奥山の両演習林を合わせたものを『千葉縣下演習林』と称した。この経過は、1900年前後の大日本山林会報に掲載された千演関係の報告、記事を通読すれば理解が容易である。

千演最初の経営案『千葉縣下演習林経営方案』（1905/M38）では、全林を清澄演習林（施業区）と奥山演習林（施業区）に分け、前者では学術の実習と研究に重点をおき、後者では経済的な経営を進める施業実験林を育成する方針であった。しかし、5年後の『千葉縣下演習林改訂経営案』（1910）からは、清澄、奥山の区分を廃止、全林が1施業区、47箇林班からなる現在の形で扱われるようになる。

以後、『奥山演習林』の名称は聞かれなくなるが、いっぽうの『清澄演習林』は、時には範囲を全林に広げ、いわば『千葉縣演習林』の愛称として、昭和年代初期まで使われ、印刷物の題名などにも残されている。古い時代の人々には、『清澄』あるいは『清澄山』への特別の思い入れがあったようである。

公印には登場しないが、『千葉縣下演習林』の『下』は、大正年代末ぐらいまで、随意、付けられたようである。千演最初の1918/T7年概要の表題は『千葉縣下演習林概要』で、対応したと思われる2万分1林班配置図の表題も『千葉縣下演習林』

とある。しかし、1922/T11年概要と対応の地図表題からは、ともに『下』がはぶかれている。

この章、最後の節【I-4 1900/01年の運営方針】の記述は、清澄に派出所ができた1898年に着任、1909年まで主任を務めた松村繁朶助手と演習林本部（本演）との往復文書（本演保管）によった。沿革史資料（1）のいう『千演創草期』を知る一資料と思われる。

I-1 往復文書綴

—まえがきに代えて—

千葉演習林天津事務所の二階に、押し入れ改造の書庫があり、事務関係の書類が保存されている。そのひとつに、千葉演習林（千演）と演習林本部（本演）その他とのあいだでやりとりした文書をファイルした『往復文書綴』がある。明治、大正から昭和初期までは、1年分が1冊にまとめられているが、書類の増加で、昭和二十年代に年間2冊となり、最近では年間4冊がふつうになった。したがって書庫のかなりの部分を、往復文書綴が占めている。

筆者が千演所蔵の往復文書綴に目をとおした最初の動機は、造林学現地実習の古い記録を求めてであった。残念ながら実習関係については、期待したほどの資料を見付けることはできなかった。しかし往復文書綴には、昔の演習林の状況を、いきいき伝える資料が少なくないことを知った。このことについては、本学学内広報803(1988)淡青評論に、『古い記録』の表題で寄稿した。

千葉演習林は、歴史のもっとも古い大学演習林であるが、いろいろな事情から五十年、七十五年などの節目に、独自の沿革史をまとめることができなかった。もちろん各期の経営案（経営方案→試験研究計画）、各時代の概要、その他の文献などから、沿革のあらましを知ることは可能である。また各事項ごとの資料整理が意図され、『沿革史資料』として『演習林（東大）』に掲載されつつある。1994年に迎えた百周年を契機に、正史としての沿革史編纂も話題にされよう。

これに対し本『メモ』では、往復文書を掘りどころに、逸史的な資料のまとめを試みた。取り上げた項目は、主として往復文書綴の通覧中に、筆者自身が興味を感じたもので、かつて断片的に聞いた事項が多い。

時代は原則として、明治、大正から昭和年代前半期までとした。昭和年代後半期に入ると往復文書綴は厚くなるが、内容の大半を一般的な事務連絡文書が占め、千演自体を垣間見る『メモ』の素材が乏しくなるからである。ただし項目によっては、最近

にいたる経過や資料をつけたした。

資料の中心に往復文書をおいたが、もちろん、それだけでは十分な記述はできない。もともと往復文書には、雑多な内容の断片といった性格がある。さらに当事者の価値判断や、時には不注意で、ファイルされなかった文書も少なくないはずである。また場合によっては、記述の力点が核心と一致せず、内容に検討を要するばあいも予想される。

したがって往復文書の活用には、前後の脈絡の検討や、他の資料、文献との照合が重要となる。また往時を知る人の記憶にたよるのが有効なこともあるが、それには少々遅過ぎた時代を、ここでは主に扱った。

表題は同じ『往復文書綴』であっても、内容は時代とともに少しずつ変わる。明治、大正の演習林組織が小さかった時代には、千演主任（1942/S17年から千演林長と改称）と演習林長、あるいは千演と本演の各当事者間のやりとりに、それぞれの個性が色濃く残されている。しかし組織が拡張し、整備されるにしたがい、しだいに人間臭さは薄れ、画一的で事務的な文書が多くなる。

個々の人間に代わり、組織が演習林を動かす時代となり、多くの書類は各掛に分散保存されるようになる。また最近では、途中経過を文書に残さず、電話で処理してしまう事例も増加した。往復文書綴に興味のもたれる文書が少なくなった所以であろう。

昔も、とりわけて重要なことが決まる過程は、当事者間の内々の相談で進行し、たとえ文書となっても、往復文書綴に残ることは少なかったと思われる。しかし現在とくらべ、古い往復文書綴はファイルされた文書の内容の範囲が広く、忘れられた時代の雑多な出来事の記録で充満している。その面白さにつられ、力不足の無理を承知で、この『メモ』をまとめた。

1915/T4年の主任交替（菌部助教授→高嶋囑託）の引き継ぎ覚書によれば、千演における往復文書綴は、1899/M32年度に始まる。ただし、『往復文書綴』の表題になるのは、1909/M42年度以降で、それまでは『来信書綴』と『起案書綴』とに分けられている。

現在、1905/M38年度と1912/M45・T1年度の、両年の往復文書綴が見当たらないが、他は比較的良く整理されている。ただし、太平洋戦争中には、順不同や雑書綴との混乱などがみられる。

往復文書の大半は、本演とのあいだの書類である。本演の地下書庫に、対応の文書の一部が年度別に『千演往復綴』として保管されている。現存の年度は、M33～41, 43, 44, T3, 5～7, 9, 10, 15, S3～5, 7～17の各年で、S18年度以降は『各演往復綴』として一括される。

かつて本演で、古い書類の処分が進められたことがあった。そのさい一部の書類については、当時の研究部長前沢教授の制止で、破棄が中断されたという。現存の千演との往復綴は、その結果残されたものであろうが、水に漬かり損傷のいちじるしい年度もある。なお、M45・T1年度の往復文書綴は、千演、本演とも見当たらないことになる。

引用資料の表示方法

内部資料

【往復文書】：保管場所，発信年／月／日〔発信番号〕

（場所：C:千演，H:本演， 年号：M:明治，T:大正，S:昭和）

例1：HM35/03/12〔C173〕 本演保管，明治35年3月12日，千演173号発信

例2：CS28/02/23〔H743〕 千演保管，昭和28年2月23日，本演743号発信

往復文書の引用は，千演在任中に作成した書き抜きメモと若干のコピーによった。コピーした文書のみ発信番号を付けた。メモのみの場合の表示年／月／日は，受信年月日の場合があると思われる。なお，千演，本演以外の文書については，必要に応じて発信者名，番号などを記載した。

【施業沿革史（原簿）】：E，年度

例：ES11 千演施業沿革史，昭和11年度

1935/S10年4月の主任会議（のちの地方林長会議）で，昭和10年度からの作成が決まったCS11/02/03〔H215〕。なお，『沿革史，自明治二十七年至昭和十七年，千演』^{ESS}は，往復文書綴などを参考に，佐藤 修氏がまとめたもので，五十周年の準備資料のひとつと思われる。

【経営案】：K，次

例：K5 千演第五次経営案

【造林学現地実習プロトコル】：P，年

例：PT7 千葉縣下清澄演習林造林学実習ぶろところ，大正7年

本多静六教授時代の造林学現地実習の記録で，1916/T6年から1922/T11年まで，各年ごとに製本保存されている。

一般の文献

引用文献は，各節の終わりに，それぞれしめした。著者名，表題などは，できるだけ原文どおりとし，誌名の省略は通例にならった。ただし，引用の多い『山林』誌と

『演習林（東大）』は、以下のようにした。

【山林】：『大日本山林會報告』（1-132,1882/M15 年-1893/M26 年）,『大日本山林會報』（133-546,1894/M27 年-1928/S3年5 月）,『山林』（547-, 1928/S3 年6 月-）と誌名が変わったが、文献表ではすべて『山林』とした。

【演習林（東大）】の（東大）をはぶいた。

原文の引用

表記は、できるだけ原文に近づけた。すなわち、異体字、かなづかいは原文どおりとした。ただし必要に応じ、句読点、濁点などを入れ、読みやすくした。なお手書き文書では、正字、略字、俗字、あるいは標準字体と異体字体が、おおらかに混用されている場合もある。活字になると受ける感じが変わるが、原文のままとした。本文中に原文を引用するさいは「」を付け、区別が付きやすいようにした。

I-2 千葉演習林案内資料

—これまでに印刷配布された概要、視察案内、 地図など、全般的な資料のリスト—

(1) 概要

【東京帝國大學農科大學千葉縣下演習林概要(1918/T07)】

A5, 53p., 縦書き, [構成] 位置及ビ沿革, 立地, 林況, 經營ノ概要, 學生生徒ノ演習, 試験事項, 見本林, 附録; 演習林樹木名彙, 演習林杉形數表

大学演習林最初の概要と思われる。藺部一郎, 右田半四郎, 高嶋規孝らの協力による^{HT5/05/06}。すでに, 1915/T4年の主任交替（藺部助教授→高嶋囑託）の引き継ぎ覚書に, 『案内記』編纂の件がある。

【東京帝國大學農學部千葉縣演習林概要(1922/T11)】

A5, 56p., 縦書き

1922年4月に千葉県で, 第32回大日本山林大会が開催され, 視察旅行に千演が予定された²⁾。1918年概要が残部0のため, 視察参加者への配布用として急ぎ発行^{HT10/05/04[H31], 11/17[H161]}。発行者が『農科大學演習林』とあるが, 『農學部演習林』の誤り。1,500部を印刷した。本文への若干の加筆, 表の数値の追加, 附録『演習林杉形數表』の『演習林杉收穫表』への変更などあるが, 大部分は1918年概要と同じ。

【東京帝國大學農學部附屬千葉縣演習林概要(1933/S08)】

A5, 72p., 縦書き, [構成] 位置及ビ沿革, 立地, 林況, 經營ノ概要, 學生生徒ノ演習, 試験事項, 見本林, 保護樹並ニ保護區域, 森林動植物園, 附録; 演習林樹木名彙, 演習林杉收穫表, 附表; 氣象觀測統計表, 苗木生産費明細表, すぎ・ひのき造林費明細表, 矮林擇伐試験成績表, 森林試験測定地表, 間伐試験地成績表, 保護樹表, 植物保護區表

内容を改訂, 写真, 付表が充実した。昭和年代前半期の造林学現地実習のさい, 実習生に貸与。

【演習林概要(創立五十周年記念版, 1943/S18)】

B6, 154p., 縦書き, [構成] 沿革, 施業(經營)の概要, 管理, 學生の演習状況, 試験

沿革に重点をおいた記述(千演關係部分, p.15-32)。

【演習林の概況(1956/S31)】

B5, 6p., 横書き, 手書き 謄写印刷

【演習林の視察案内(1958/S33)】

B5, 23p., 横書き

第1篇(p.1-7)が演習林の概要になっている。

【演習林概要(1965/S40?)】

B5, 6p., 横書き, タイプ 謄写印刷

【千葉演習林概要 1977】

B5, 64p., 横書き, [構成] なりたち, 気候, 地質・地形・土壤, 林相・植物相, 見本林, 森林公園, 自然保護, 第9次経営案, 利用状況・利用案内, 研究報告, 千葉演習林植物目録, 千葉演習林と周辺の動物相

1933年以来の本格的概要。千演, 本演研究部の協力で作成。各種資料, 図, 表, 写真などで内容が充実した。

【東京大学農学部附属演習林千葉演習林概要 1988】

B5, 44p., 横書き, ワープロ版下, オフセット印刷, [構成] 位置と面積, 沿革, 気候, 地勢と地質, 植物相と動物相, 林種, 試験研究, 学生実習, 自然保護, 伐採と更新, 運営組織, 見本林樹種目録, 植物目録, 動物目録, その他(千葉演習林自然保護規則, 演習林利用申込書, 演習林研究教育利用計画書, 千葉演習林宿泊施設使用内規)

海外からの視察者増にそなえ, 英文併記。1987年10月, 北京林業大学学生一行の見学用に千演で用意した資料をもとに作成。簡便な印刷方法の採用で, 今後は, こまめな改訂も可能と思われる。

(2) 視察案内

【東京帝國大學農學部附屬清澄演習林概要 (1922/T11?)】

A2,1p. (片面印刷), 縦書き

第32回大日本山林大会の千葉演習林視察旅行²⁾参加者用。演習林概要部分は、位置及び沿革、林況からなり、1922年概要そのままである。視察地概要は清澄管内の切通南沢松野記念林など19項目からなる。千演から借地の、鍛冶坂大日本山林会造林地(T10年植栽)が、視察項目にある。表題が『清澄演習林』とある。

【東京帝國大學農學部千葉縣演習林清澄地先視察概要 (1922/T11?)】

B5,18p., 縦書き, 手書き 謄写印刷

前記『清澄演習林概要』の視察地概要部分に、ほぼ同じ。記述内容から、あるいはT8年にまとめたかと思われる。

【東京帝國大學千葉縣演習林視察案内(1940/S15)】

A5,27p., 横書き, 手書き 謄写印刷

亜熱帯植物園(天津), 清澄方面15項目, 奥山方面19項目, の視察地説明。めずらしい植物, 北限・南限の植物, 主要研究報告のリストを付ける。

【東京帝國大學千葉縣演習林視察案内(1942/S17)】

A5,20p., 横書き

亜熱帯植物園(天津), 清澄方面13項目, 奥山方面21項目, の視察地説明。めずらしい植物, 北限・南限の植物, 主要研究報告のリストを付ける。

1937/S12年ごろから, 国有林その他の視察者, 見学者が急増, 説明資料として謄写印刷の『視察案内』が作成され, 版を重ねたが, 上記1942年に, ようやく活版印刷になった。なお, 視察案内作成以前には, 『苗圃概要』『林内量水試験施設概要』『製炭乾餾試験概要』『椎茸栽培試験概要』『野獸園鹿飼育概要』『林分試験測定地間伐施行概要』などが用意されていたという³⁾。

【千葉縣演習林視察案内(1953/S28)】

B6,29p., 横書き

敗戦後, 初の印刷案内資料。昭和天皇千葉県下巡幸の年に当たる。演習林の概況として位置・面積, 経営の簡単な記述のあと, 視察のコースへ続く。視察地は, 演習林事務所(天津)2項目, 清澄方面14項目, 奥山方面17項目, および中原園場からなる。めずらしい植物, 北限・南限の植物, 主要研究報告のリストのほか, 巻頭に写真がある。

【演習林の視察案内(1958/S33)】

B5,23p., 横書き

表を主とする演習林の概要と、演習林の視察地説明資料からなる。視察地は、地域分けをせず、全域で53項目をあげている。

【視察案内(1981/S56)】

4 折(A5,8p. 相当分),横書き

沿革, 位置, 地況, 林況, 試験・研究からなる概要と, 9 項目の視察地説明からなる。

【東京大学農学部附属演習林千葉演習林視察案内資料 1988】

B5,16p., 横書き, ワープロ版下, オフセット印刷

1988年概要に対応。英文併記。1987年, 北京林業大学学生一行の見学にさいし, 千演で用意した資料をもとにした。自動車利用の標準的な1日の視察コースに沿った11項目の説明を掲載。

【東京大学農学部附属演習林千葉演習林案内 1993】

A4,8p., 横書き, 多色刷

広い層を対象にした, 写真と図表が主の, わかりやすい千演の紹介。

(3) 地図

【千葉縣下演習林(林班配置図, 大正年代なかば)】

2 万分の1, 4 色刷: 千演最初の印刷地図。1915/T4年の主任交替(菌部助教授→高嶋囑託)の引き継ぎ覚書に, 案内記に添付の2 万分の1 林相図を本学で製図中とあり, 1918年概要に対応すると思われる。

【千葉縣演習林(林班配置図)】

表題の変更以外は上記と同じ。後年の増刷と思われる。

【千葉縣演習林(白地図)】

1 万分の1, 3 色刷: 林相図などの作成用。

【東京大学農学部附属千葉演習林(1972/S47)】

2.5 万分の1, 4 色刷: 建設省国土地理院発行の地形図に林班配置図を重ねた。後記の植生図(1973)と対応。

【東京大学千葉演習林林相図 1975(1976/S51)】

1 万分の1, 多色刷: 演習林研究部と千演の協力で作成した初めての印刷林相図で, 第九次試験研究計画に対応。

【東京大学千葉演習林林相図 1985(1986/S61)】

1 万分の 1，多色刷：第十次試験研究計画(1985-94) に対応。

【千葉縣演習林地質圖(1955/S30)】

2 万分の 1，多色刷：別記地質報告（演習林10:1-6）の付図。

【千葉演習林域地質図(1976/S51)】

1 万分の 1，多色刷：別記地質報告（演習林20:1-38）の付図。同報告には【河岸段丘分布図】も添付。

【房総丘陵清澄山地域植生図(1973/S48)】

2.5 万分の 1，多色刷：文部省科学研究費特定研究『人間生存』の研究成果。

（４）沿革関係

【清澄演習林本多教授指導造林實習日誌】

東京帝國大學農學部附屬演習林(1926/T15)，A5, 148p., 縦書き

千葉演習林創設についての記述がある。造林学現地實習の学生，生徒への貸与用として，1926年9月，本演から千演へ100冊が送られてきた^{CT15/09/09}。なお一般への実費頒布用として，『實地造林の指導』の表題で三浦書店が増刷した。増刷分には『清澄演習林』の歌と『造林實習の歌』が付けられている。

【清澄部落の研究－演習林地元部落の研究－】

島田錦藏(1944/S19)，A5, 57p., 縦書き

【千葉演習林沿革史資料（１）】

演習林研究部・千葉演習林(1974/S49)：演習林18:9-28

千演に関する参考文献，経営案の沿革，千演発足以前の土地所有と森林の状況など。続く資料（２）として研究史を予定し，千演に関係ある研究論文のリストを準備していたが実現しなかった。

【千葉演習林沿革史資料（２）林産物処分の施業期，林班別集計】

糟谷由助・山口敏雄(1977/S52)：演習林21:1-21

【千葉演習林沿革史資料（３）東京大学農学部林学科学生の造林学現地實習の変遷】

根岸賢一郎・鈴木 誠・斯波義宏(1991/H03)：演習林28:13-57

【千葉演習林を利用して行われた試験研究目録（1894年～1987年）】

東京大学農学部附屬演習林(1988/S63)，B5,p.5-51

『東京大学演習林を利用して行われた試験研究文献目録（1894年～1987年），182p.』からの抜刷。1953年視察案内と1977年概要の主要文献目録，沿革史資料（１）の続編として準備の文献目録などを参考に，文献を再調査した。短期間

での作成のため、誤り、脱落が多い。その後、『東京大学演習林における試験研究 100年(1994)』で訂正増補されたが、古い時代については、なお脱落がある。

【演習林の近況(1946/S21～1953/S28)】

演習林**10**:87-139 (1955/S30)

【演習林の近況(1954/S29～1960/S35)】

演習林**14**:171-257 (1962/S37)

『演習林の近況』は第一回以後、数年おきに発行の予定であった。しかし原稿がそろわず、第二回の発行が遅れた。その後も原稿の集まりがわるく、中断されたのは惜しまれる。

【東京大学演習林における運営・施業の現状と課題、第1回、1976/2月施業案会議報告】
東大演習部(1977/S52), 50p.

【東京大学演習林百周年記念】

演習林 **32**(1994/H06), **33**(1995/H07), ……

各演ごとの創設・沿革、森林および施設の現況、実習および研修、試験研究、施業(経営)の沿革、年表など、および100周年記念資料(退官者の懐古メモなど)。

(5) 気象関係

【演習林気象報告(年報)】

[清澄1923-1928, 郷台1923-1927] 東大演報**10**: ページなし,

[清澄1929] 東大演報**13**: ページなし, [清澄1930] 東大演報**15**: ページなし,

[清澄1931] 東大演報**16**: ページなし, [清澄1932] 東大演報**18**:110-111,

[清澄1933] 東大演報**20**:214-215, [清澄1934-39] 演習林 **2**: 8-19,

[清澄1940] 演習林 **4**: 28-29, [清澄1941-45] 演習林 **8**:118-127,

[清澄1946-50] 演習林 **9**:92-101, [清澄1951-55] 演習林**11**:120-129,

[清澄1956-60] 演習林**14**:80-89, [清澄1961-65] 演習林**16**: 94-103,

[清澄1966-70] 演習林**18**:196-205, [清澄1971-75] 演習林**19**:4-13,

[清澄1976-80] 演習林**23**: 4-13, [清澄1981-85] 演習林**25**:4-13

【千葉演習林気象報告】

[天津, 中原, 清澄, 札郷, 郷台 1960-74 (中原1972まで, 郷台1970-72 欠測)] 演習林 **20**:65-80, [天津, 清澄, 札郷 1975-84 (中原廃止, 郷台欠測多く不掲載)] 演習林 **25**:49-59, [天津, 清澄, 札郷, 郷台 1985-1989 (清澄のみ1986から)] 演習林 **29**:147-165

【東京大学演習林気象月報集】

[清澄, 天津, 郷台, 札郷 1989] 演習林**28**:59-93

【東京大学演習林気象報告（月報と年報）】

[清澄, 天津, 郷台, 札郷 1990] 演習林**29**:211-244, [同 1991] 演習林**30**:147-180,

[同 1992] 演習林**31**:45-78, [同 1993] 演習林**33**:119-152

【千葉縣演習林森林被害寫眞帖】

東京帝國大學農學部演習林(1922/T11), A5, 12pl.

雪害(T01)2, 豪雨崩壊(T05)2, 台風害(T06) 8 葉の計12葉の写真と説明。前記の視察案内とともに, 第32回大日本山林大会²⁾での頒布用に作成。別記の見本林案内も付す予定であった^{CT11/02/01,04}。

(6) 地質関係

【農科大學所屬千葉縣下演習林地質豫察報文】

脇水鐵五郎(1901/M34): 山林**222**:1-8, **223**:5-11, **224**:1-12

【千葉県演習林内の地質】

小池 清・西川 泰(1955/S30): 演習林**10**:1-6

【千葉演習林の地質】

飯島 東・池谷仙之(1976/S51): 演習林**20**:1-38

(7) 生物関係

【東京帝國大學農學部千葉縣演習林見本林要覽】

東京帝國大學農學部演習林(1926/T15), A5, 18p., 縦書き

【千葉演習林の植生調査報告】

糟谷由助・佐倉詔夫(1974/S49): 演習林**18**:67-78

【千葉演習林の保護樹調査】

長谷川 茂・佐倉詔夫・糟谷由助・糟谷重夫・川名一夫・鴫田 好(1974/S49): 演習林**18**:79-101

【千葉演習林産植物目録】

千葉演習林(1985/S61): 演習林**24**:13-63

【森林植物遺伝子資源】

東京大学農学部附属千葉演習林(1989/H01), B4, p.193-255

『全国大学演習林協議会編：国立大学演習林の所有する森林植物遺伝子資源，1048p.』からの抜刷。

引用文献

- 1) 佐藤 修(1995): 千葉演の思い出，演習林**33**:57-103
- 2) Anon.(1922):大日本山林會第三十二回大會記事，山林 **478**:23-25（千演関連部分）

I-3 公印に見る千葉演習林名の変遷

【東京帝國大學農科大學附属演習林派出所之印】 図1①

1897/M30年，京都帝国大学の開学にともない，『帝國大學』は『東京帝國大學』と改称。1894年創設の千演には，『帝國大學農科大學附属』の時代があるわけだが，清澄への派出所設置は1898年なので，この印が最初と思われる。

【東京帝國大學農科大學千葉縣演習林】 図1②

1911/M44年後半から使用^{HM44/06/24[H59]}。『千葉縣演習林』を入れる。同じ形式を，台湾演習林では1909年ごろから，また北演では千演と同時代から使用。

【東京帝國大學農學部附属千葉縣演習林印】 図1③

1919/T8年2月，『農科大學』は『農學部』と改称。

【東京大學農學部附属千葉縣演習林印】 図1④

1947/S22年10月，『東京帝國大學』は『東京大學』と改称。

【東京大學農學部附属千葉演習林印】 図1⑤

1958/S33年4月の地方林長会議で『千葉縣演習林』から『縣』を除くことを決定。翌年改印につき本演に照会したが^{CS34/04/18}，改称は未確定との回答があった^{CS34/04/24}。林学科の一部に反対意見があり，中途半端のままで経過，公印は1965/S40年になって改正^{CS40/01/07[H575]}。以後1985/S60年まで使用。

現在は，【東京大学農学部附属演習林千葉演習林印】を使用。

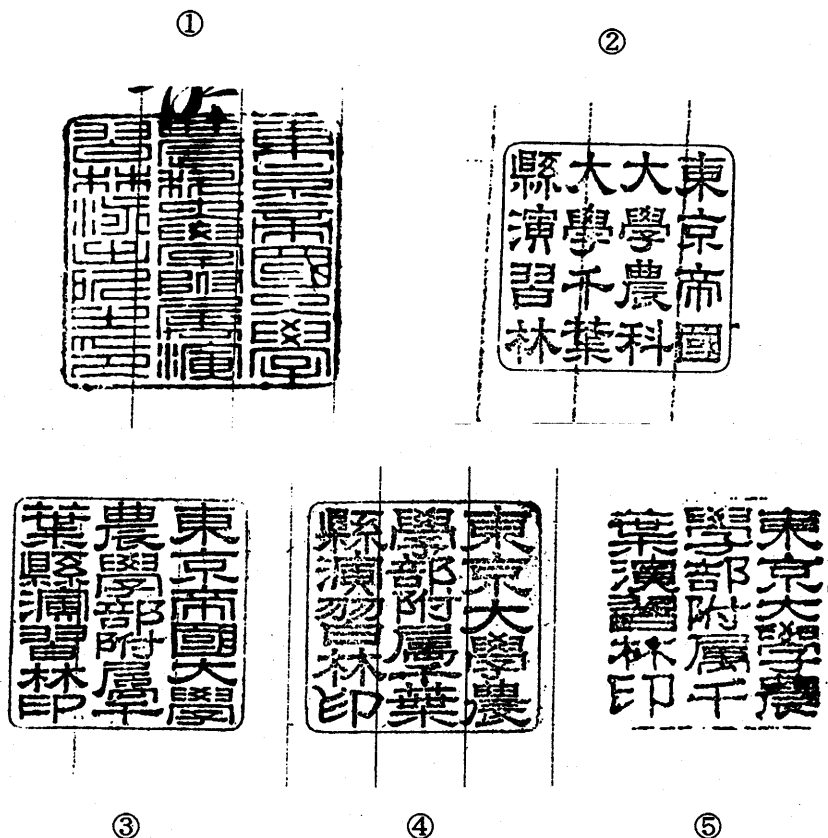


図1 千葉演習林の公印の変遷

I-4 1900/01年の運営方針

古い往復文書綴に残る千演初期の運営方針を以下に紹介する。第一次経営案の編成される以前の、19世紀末/20世紀初めで、現地の職員も林学科の教官も、どう演習林を扱っていくのか、手探りの時代であった。

千葉演習林は1894/M27年、清澄官林3百haで発足。1897年、奥山官林など1.8千haが編入された。翌1898年、演習林長をおく東京帝国大学官制第十五条がきまる。同年、清澄に派出所をおき、乙科新卒の松村繁衆助手が着任。1899年、清澄に庁舎、寄宿舎が完成、現地の管理体制が徐々にととのう。

千演の第一次経営案（千葉縣下演習林經營方案）は、1905年に始まるが、それ以前の時代の運営方針は、どのようにしてきまったのであろうか。本演保管の往復文書綴に残された以下の諸文書は、1900/M33年ごろの状況を知るのに役立つと思われる。原文は、いずれも縦書きで、正字、略字などが混用されているが、つとめ

て原文に近い字体とし、句読点と濁点を入れた。

【松村→川瀬演習林長】 HM33/09/07[ナシ]

1. 本年度ノ収入ハ別紙列記致シ候如ク、割合ニ饒カニ有之候ヘバ、從ッテ道路擴張等必要ナルモノハ直チニ着手致シ度ク候。道路ハ『清澄ヨリ池ノ沢ニ至ル部分（第一着）』ト『郷台畑道路ノ出口ヨリ四郎治沢ニ至ルノ間（第二着）』ニ有之、凡ソ貳千七百間位ト存候。

2. 養魚池ノ見積リ書ハ近々ノ内、差出ス事ニ候（小梅屋請負）。機械小屋二間×三間＝六坪ハ、是非トモ本年度ニ建設致シタク候ヘバ、差支ノ有無至急御報知被下度、直チニ造材ニカ、ル積リニ有之候（百貳十円以内ノ見込）（造材トモ）。

3. 造材試験＝立木拂下ノ節、價格ヲ定ムルタメ、立木ヨリ得ラルベキ材種ヲ試験スル事、小生ノ位置ヨリ甚ダ必要有之候ニツキ、目下大降西ノ斜面ニテ風致ニ關係セザル部分ヲ撰シ、五、六本ノ縦ヲ伐採造材（最モ利益アル材種ヲ造材セシム。造材ハ定夫徳次郎首任）スル事ニ着手致シ候。此レニ就イテハ地元ニ或ハ故障ヲ言フヤモ不計候ヘドモ、表面ヨリ故障ヲ持ち込ム可キ理ナキ事ナレバ、或ハ例ノ手段ニヨリ離間策ヲ成スヤモ不計候ヘバ、前以テ應造材試験ノ事ヲ御通知仕候。

造材試験ハ徳次郎ヲシテ、最モ利益アリト思考スル通りニ造材セシメ、一定ノ樹木ヨリ如何程ノ成材ヲ得ベク、又、立木ノ低賣却スレバ幾円、工作ヲ加フレバ幾円トナル等ヲ檢シ、造材業ノ利益損失ヲ試験スルモノニ候。ツマリ造材上材種撰擇ノ智識、并ニ、立木ヲ見テ成材ノ歩合ヒヲ知り、又、其價格ヲ知ルニ必要ナル試験ニ御坐候。從ッテ眞ノ木材價ヲ知り得ベクト存ズレバ、清澄辺ニテ使用スル『カマチ』（平物）、八分板、四分六分板、桎天井板等、凡テヲ製シ、之レヲ相当價格ニ賣リテ、價格マデモ試験スル事ナレバ、清澄辺ヘハ一打撃トナル事ニテ候ヘバ、大ニ故障スベキ様ニ思ヒ候。早ヤ既ニ少シ其気味ノ見ヘシ事モ有之候。実ハ此レハ次ニ官行事業ヲスルタメノ下試験ニテ御坐候。

4. 官行事業＝是非トモ行ヒタク候ガ、用材ニテハ池ノ沢ノ杉立木、本数百六十三本、材積四百四十尺メ、ナドガ宜シカルベキカト存候。徳次郎ハ是非トモ遣ラシテ貰ラヒタシト申シ居リ候。次ハ製炭事業ニテ、大降西ノ縦山ノ向ヒノ沢ハ、樹木良好ナレバ試験ノニ遣リタク存候。之レニハ小生充分責任ヲ持ち候ヘバ、御許容アラン事ヲ願ヒ候。損スルトモ山ヲ少シ安ク立木ノマ、賣ッタ位（清澄ニテ一棚一円五十錢位）ニテ、特賣ヨリ損ハセヌ事ニ候。甘ク行ケバ、少シハ利益ヲ得ベク候（十分監督シ千代藏ニ製炭セシム）。

5. 池ノ沢特賣（黄和田畑ヘ輪伐トシテ）ハ如何ニモ残念ニ御坐候。小生ノ考ヘニ

テハ、大學ニテハ兎テモ詮議スベキ限リニアラズトシテ跳ネツケル事ト存候ヒシニ、殆ンド意表ニ出デ候。本年度ハ是非トモ池ノ沢ノ残部（公賣スベキ五町五反歩外）ハ、明年マデ残シ置キ度候。特賣ニスルトモ来年マデ延バシ度候。夫レデ本年度ハ四郎治ヲ特賣シ、明年ノ詮議ニスルト致シ度候。此レモ一應御返事被下度候。

6. 収入ハ殆ンド八千五百円程ヲ得ベク候。然カレドモ尚ホ上木ニテハ、背稻沢、桑ノ木沢（昨年度下木特賣ケ所）ノ全部、面積三十町歩ト、昨年公賣ケ所（雑木）鳥居沢ノ上木、面積十町歩ハ全然残り居リテ、明年度公賣ケ所トナルベク候。

7. 明年度ノ四方木ヘノ特賣ハ、四郎治ノ一部ヲ與フルカ、相ノ沢ノ一部ヲ與フルカニ致スベク、大抵都合付クベク候。

8. 公賣期節ハ十月ノ十日頃ナラバト思ヒ居リ候。孰レ収入支出ノ額ノ御返事ニヨリ上申ノ手續キヲ致スベク候。公賣濟ミ次第査定ニ取り掛ルベク候。

9. 機械部屋＝新営ノ儀ハ是非トモ御聞キ届ケ相成リ度ク、若シ本年度ハ清澄ヘハ新营造ハシナイトアリテハ、増加シタル器具機械ノ置キ所ニ困ジ保管容易ナラズ候ヘバ、小屋トシテ营造許可相成度候。圖面等ハ次便ニ御届ケ仕ルベク候。先ヅ右迄
匆々

九月七日

松村助手

川瀬演習林長殿

演習林の整備を進めるには資金が入用である。そのための予算獲得には収入努力が重要で、官行事業による収入増が意図された。しかし、清澄方面には清澄寺領時代からの、奥山方面には藩政時代からの、林産物についての地元部落との慣行があった²⁾。演習林の新しい動きに、地元が不安をもつのは当然である。そうした不安に対応しながらの運営に、松村以下の千演職員は苦心したと思われる。

また、養魚（別節【清澄の鱒養魚】参照）、製炭（別節【木炭の演習林】参照）などの試験の開始が準備された。

同じく1900年10月から11月にかけて、松村と演習林長ならびに林学科各教官とのあいだで、千演の運営方針が検討された。

『松村→川瀬演習林長』HM33/10/22[ナシ]

今ヨリ歩ヲ進メテ取りカ、ル可キ當演習林事業ニ就キ、小生ガ企圖スル第一着ノモノヲ次ノ如ク列記シ御意見伺ヒ候。付テハ各主任教官諸先生ヘ御相談被下候。出来ウベクナラバ御許可相成リ度ク取り急ギ申請仕候間何分ノ御指揮相成度候也。

明治参拾参年拾月貳拾貳日

千葉県下演習林在勤 松村助手

川瀬演習林長殿

い第壹号 経理 右田先生ニ御相談ノ部

明三十四年四月、三年生ノ経理演習ノ場所ハ、一作業区トシテ井乃川十三澤ヲ撰定セラレン事ヲ希望致シ候。之ニ就テ小生ハ御簾納準雇員ト共二十三澤ノ測量ニ従事シ、明年五月中旬マデニ各澤ノ周囲ヲ完結シ、御引キ渡ヲナス豫定ニ御坐候。

井乃川経理演習生ノ宿舍トシテ郷台畑ナル山小屋ヲ使用セザル可カラズ。然ルニ今ノ小屋ノミニテハ手狭ナル為、一ノ物置キ様ノ小屋ヲ増築シ、平時ハ苗圃ノ日除ケ、霜除ケ等其他ニ要スル材料、簾、竹類ヲ貯蔵スルノ用ニ供シ、演習ノ際ハ定夫、人足等ノ宿所並ニ賄所ニ使用スルモノヲ造ル事ヲ申請致シ候。

仕様：掘ッ建テ、板壁、茅葺ニシテ、平時ハ土間、演習ノ際ハ仮リニ板ヲ渡シ座ヲ作り庭ヲ布ク事ヲ得ル様ニス。建坪八坪七合五勺（三間半×二間半）、豫算六拾七円五拾銭。

い第二号 造林 本多先生ニ御相談ノ件

1. 明三拾四年度ノ造林ケ所、大仙場並ニ追加造林豫定地ナル四郎治澤（伐採面積十五町歩余）ノ地拵ヘハ、本年度ニ於テ之レヲナシ、造林費ハ三拾四年度ヲ以テ支出スル豫定ニ候。

大仙場ノ造林ハ当所ヨリ苗ヲ給シ、四方木並ニ坂本ノ人足ヲシテ保険附キノ造林ヲ請負ハシメ、四郎治澤ノ造林ハ地元ナル藏玉村民ノ希望ヲ以テ苗木トモニ造林ヲ請負ハシメ、同ジク保険ヲ附スル積リニ有之候。清澄ニ於テハ、大平造林地ト一、二ノ台造林地トノ間ニ介在セル向峯、通称足谷（アジャツ）（昨年度坂本雑木特売）壹町八反歩ニ扁柏ヲ造林シ又、後澤杉立木伐採跡地ヘ杉ノ造林ヲナシ、足谷ハ坂本、後沢ハ清澄ヘ保険附キ請負ヲナサシムル事ニテ候。

2. 造林試験ハ明年ノ春ニ、今澄試験木伐採跡地、並ニ荒樫ノ今澄ニ接スル部分ニテ四方木道ノ通ズル南側ナル竹藪ノ如キ外觀ヲ呈セル部分ヲ開キテ、造林生着試験ヲ行フ目論見ニテ候。試験ノ目的ハ實際ニ屢々際會スルモノニ有之、即チ苗圃ヨリ掘り取り直チニ其日ニ植ヘ付ケタルモノト、一日ヲ荷作りノ内ニ過ゴシテ後、植ヘ付ケタルモノ等トノ生着比例ヲ試験スルモノニ有之候。結局、苗木ヲ若干ノ遠距離マデ運び得ベク、又若干ノ遠距離ヨリ購入シ得ルヤノ試験ニ有之候。

今澄並ニ荒樫ノ試験地ニ撰定シタル所ハ道路ノ邊リナルヲ以テ、時々點檢ニ極メテ便利ナレバ特ニ撰定シタルモノニテ、永ク試験地ニ使用スル積リニ有之候。

3. 郷台畑苗圃ノ近邊ニ竹林ヲ造ル件。

郷台畑苗圃ニ要スル竹類、年々少々ニアラズ、而シテ其供給ハ四方木部落ヨリ受ケ居リ候ヘドモ、運搬等費用甚ダ多クシテ連年ノ負擔重キニ堪ヘザレバ、本年度ニ於テ郷台畑溪流ノ兩岸雜木ヲ伐採シタル所ヲ開キテ竹林ヲ仕立テ、溪流付近ヲ悉皆竹林トナシ、竹材ヲ供給スルヲ目的トスルモノニ有之候。本年度ノ費目豫算六拾円ニ候。

4. 郷台畑開墾ノ件。

苗圃地ノ開墾セラレシモノ六反歩ニ過ギズ、然ルニ本年度ノ一年生苗木ニシテ明治三十五年度ニ山出シ苗トナルベキ見込ミノモノ凡ソ五拾萬本ヲ移植スルニハ、少クトモ七反歩ヲ要シ、又三十六年度ニ山出シスル扁柏並ニ杉等ニテモ尚ホ四反歩ヲ要シ候ヘバ、殆ンド新タニ壹町歩ヲ開墾シ置カザルベカラザル事ニ候。昨年度ニ於テハー坪ニツキ弍錢五厘（掃除費別ニ弍錢五厘）ヲ以テ小梅屋ニ受負ワシメシカド、其結果ハ小梅屋ノ損失拾數円ニ上リタリトテ今ニコボシ居リ、今回ハ掃除ヲ別ニシ四錢五厘ナラズバ兎テモ請負得ズトノ事ニテ、他ノ土方職モ掃除ヲ兼ネテ坪金五錢ナラズバ請負ヘズトノ事ニ候。サレバ掃除ヲ兼ネ金五錢ト見ルトキハ、壹町歩金百五拾円ヲ要シ候。之レハ是非トモ本年度ニ於テナサルベカラザルモノニ有之候。（注、五拾萬本ヲ移植シテ山出シ苗參拾萬本ヲ得ベキ見込）

い第參号 林政ニ屬スル件

濁川、仲沢、前澤ニ於テ民有田圃ニ隣レル本學所屬原野並ニ山林ハ概ネ平坦ニシテ杉、扁柏、松等ノ造林地ニ好適スル所ニ候ヘドモ、之レニ杉等ヲ造林スルトキハ、民地ノ穀作物收穫ヲ減損スル事少々ニアラザルヲ以テ人民ノ苦情夥多シク、兎テモ喬林ヲ仕立テル事ヲ得ベカラズ。本學モ亦、情トシテ田圃ニ日陰ヲ與フル造林ハ之レヲ見合スヲ要スル事ト存ジ候。然レドモ廣袤弍拾餘町歩ニ亘ル比較的平坦ナル土地ヲ、悉ク不耗ノ原野トシテ放置スルハ、甚ダ不得策タルヲ免レズ。必ズ相当ノ取扱ヒヲナサル可カラズ。全原野ハ毎年春ノ初メニ於テ火入レヲナスヲ例トシ、之レマデ時々野火ノ延焼ヲ來タシ、次第ニ原野ヲ擴張シタル形跡十分ニ候ヘバ、小生ハ之レガ豫防ト原野ノ利用トヲ兼ネテ、目下左ノ如キ意見ヲ有シ候ヘバ御一考被下度候。

一、田圃ニ隣接シタル部分ニシテ必要ト認ムル場所ハ、之レヲ当民有地主ニ借地セシムル事（借地料無料）。

二、借地者ハ當借地ケ所ヲ草生地トシ、肥料ヲ採集スル事ヲ許可ス。

三、借地ケ所ノ外圍、演習林ニ接スル部分ニハ適當ナル防火線ヲ設定シ、借地者ヲシテ毎年十分ニ之レヲ刈リ拂ハシメ、火ノ延焼ニ對シテ充分ノ責任ヲ持タシムル事。

四、借地ノ年限ハ壹年或ハ五年間トシ、出願セシムル事。

五、借地ケ所外ノ原野ノ利用トシテ矮林ヲ仕立ツル事。野火ノ為雜生木ノ絶種セシ所ハ人工植樹法ヲ以テ檜類ヲ造林シ、雜生木種アル所ハ萌芽造林ヲナス事。

六、雑木林ニテモ尚ホ仕立テ得ザル関係アルケ所ハ棕櫚（シュロ）或ハツゲ類ヲ造林シテ相当ナル収益ヲ期スル事。之ヲナスニハ田圃ニ隣レル平坦ナル場所ヲ撰シ、先ヅ地拵ヘヲナシ棕櫚ノ苗木ヲ植ヘ付ケ、周囲ニ枳殻（カラハ）ヲ二重或ハ三重ニ植樹シ、一ハ防火用ニ供シ、一ハ窃盜ヲ防グノ用ニ供スルトキハ、棕櫚ノ皮ヲ採取シ得ル頃ニハ枳殻既ニ十分生長スル豫定ニ有之候（棕櫚ノ皮ヲ剥グ迄ニ凡ソ八年ヲ経過ス）。

い第四号 境界査定ノ件

境界分明、争ヒナキ場所ハ大速力ヲ以テ切り通シヲナシ境界ノ杭ヲ立テ、争ヒアル部分ハ互ニ見込ミ通りニ切り通シヲ作り別ニ杭ヲ立テズ、未定ケ所トシテ後日ニ残シ、黄和田地先ヲ終リテ直チニ井乃川、四郎治、土澤等、折木澤、藏玉地先キノ仮査定完結ケ所ニ赴キ、測量製図之調印ヲ取り、而シテ再ビ黄和田畑ニ帰り争ヒヲ決スベク、勿論困難ナル所ハ御意見ヲ伺フノミナラズ、冬期御出張ヲ俟チ御実見ヲ乞フ筈デ候。前述ノ如クスルハ必竟黄和田畑ニハ公正図面ガ侵畧ノ結果ノ通り出来アレバ、之レガ取り戻シ困難ナル上、折木澤等モ同様ニテ、幸ニ取り返シタル場所有之、然ルニ一朝黄和田畑ニテ不成績ヲ得レバ、折木澤ノ方面調印ヲ拒ムノ出来事ヲ生ズル恐れ有之候故ニ御坐候。之ニ就テハ折木澤ノ方ノ査定杭番号ハ如何ニ致ス可キヤ、別ニ壹号ヨリ初ムルヤ、其邊御回答被下度候。

い第五号 測量 諸戸助教授殿ニ御相談ノ件

演習林測量法ハ三角測量法ニヨリ骨格ヲ作りテ後ハ、左ノ方針ヲ以テ進行スル覚悟ニ有之候。

一、民地トノ境界、即チ演習林ノ外圍並ニ四方木民有地ニ接スル内圍、及ビ各作業区ノ境界線ハ共ニ、テオドライトヲ用ヒテ屈線測量ヲナシ、経緯距ヲ算シ三角点ヲ以テ平均ス。其免諒境界ハ河合先生ノ測量書ニ依ル。

二、各沢境及ビ主要ナル分水嶺并ニ溪流ハ羅針盤ヲ用キテ測量シ、経緯距ヲ算シ、三角点ニヨリ平均ス。其他ハ見取り法、或ハ平板法ニヨリ図上平均法ヲ以テ測定ス。

三、高低線ハ二十メートル毎ニ図中ニ画ク。

四、圖面ハ基本圖ハ五千分ノ一ニ作り演習林全圖ヲ製ス。林相圖ハ一万分ノ一ニ作り又、尚ホ二千分ノ一ノ切圖ヲ製シ細密ナル地形ヲ調ブ。

い第六号 官行事業ノ件 附運材装置并ニ造材装置

演習林造材官行事業ノ第一着手個所タル池ノ澤ノ杉林ハ、明年四月ニ至レバ造材ヲ終結スル豫定有之候ガ、池ノ澤ノ杉林ハ微々タルモノナレバ造材法モ旧式ニヨリ、運搬モ主トシテ牛馬ノ背ニ依ル事トテ、演習林ノ事業トシテハ殆ンド兒戲ニ近ク、唯単ニ杉ノ立木ト粗材并ニ精材ノ割合ヲ見ルニ過ギザルモノニ有之候。然レドモ演習林ノ官行事業ハカ、ル微々タルモノヲ以テ満足スベクモ候ハズ、必ズヤ少クモ進ミテ造材

并ニ運材ノ装置ヲ設ケ、地方ニ造材并ニ運材ノ模範ヲ示サズンバ、演習林ノ演習林タルニ恥ヂザルヲ得ザラントス。

小生窃カニ考フルニ、本年度黄和田畑外三區へ特賣輪伐払下ヲナシタル部分ナル四郎治澤ノ一部ハ、其面積參拾町歩ニ余リ、其内ニ成立スル樅、栂、松等ノ立木ハ材積決シテ萬尺メニ下ラザルベク、又明年度輪伐ニナスベキ個所其他ヲ合スレバ材積少クトモ參萬尺メノ上ニ出ヅベシ。斯ル巨幹良材ハ、今一兩年ノ間ニ必ズ之ガ處分ヲナサザルベカラズ。然ルニ本年ノ例ニ見ル如ク、公賣ニ於テモ四郎治沢立木ハ、其價格他ノ部分ニ及バザル事甚ダ遠キノミナラズ、嘗テ地元ナル黄和田畑、藏玉等村民ノ懇願ニヨリ平均壹尺メ僅カニ十九錢未滿ヲ以テ特賣シタルモノスラ、拂下人ノ大損耗ニ帰シタリトテ不平ノ聲ノ今日ニ至ルマデ、全村民ノ口ヨリ洩レツ、アルハ、小生ガ屢々耳ニスル所ニシテ、斯ノ如キハ必竟、造材法並ニ運搬法ノ宜シカラザルニ基クモノタル事ハ、小生ノ固ク信ジテ疑ハザル所ニ有之候。

抑々四郎治澤ノ位置タル、東ハ七里川並ニ樞要里道ヲ僅ニ、十餘町（直距六、七丁）ノ所ニ控ヘ、其間ハ赤井澤、上人沢、神田上等ヲ挟ミ、共ニ皆、伐採跡地ナレバ、之レニ鉄条運搬装置ヲ設クルトキハ、直チニ四郎治ノ峯頂ヨリ赤井澤ノ下口、七里川ノ岸ニ運ビ得ベシ。而シテ四郎治沢ノ内部ハ道路ヲ設計シ、木軌ヲ装置シ、運材ヲナスベク、又可成、鉄條法ヲ以テ七里川ニ下降スル材ノ重ミヲ利用シ、四郎治ノ溪底ヨリ木材ヲ引キアグル装置ヲナストキハ、極メテ簡易ニ、嘗テヨリ最モ困難視セラルル運材ヲナシ得ベシト存候。

運材法並ニ道路ハ、小生必ズ容易ニ設計シ得ベキヲ信ジ候ガ、次ギハ造材ノ装置ニテ、水力ヲ利用シ鋸機械ヲ運轉スル事ニ有之候。鋸機械ハ丸鋸一個、帶鋸附キニテ粗造材並ニ精造材ヲ兼ネタルモノ一臺八百円ニテ購ヒ得ルモノニ有之候。ヨシ、鋸機械ハ次回ニシテモ、先ヅ運材法丈ケニテモ備ヘテ此ノ地方ニ造材ノ先驅ヲナシ度クト存候。

明年度ハ小生必ズ四郎治ニ於テ、兎戯ナラザル造材官行事業ヲナスベク候。一ヶ月參十人ノ人足ヲ使役シ、定夫島野清次郎ヲ人足頭トシ、小生之レヲ監督シ候ヘバ、一ヶ月四百餘円ノ人足賃ヲ以テ七百餘円ノ材種ヲ製ス可ク、木ノ代價貳百円トシテモ必ズ百餘円ノ利潤ヲ得ベク候。毎月一回宛、赤井沢ノ口ニ於テ精材ノ公賣ヲナシ、或ハ尚ホ運材シテ價ヲ東京市場デ問フモ亦可ナリト存候。

之レ決シテ駄法螺ニ無之、演習林官行事業ノ嚆矢トシテ小生必ズ成功ヲ以テ実行スベク候。希幾クバ明年度ノ雇人料ノ豫算ヲ大ニシ、小生ヲシテ希図スル所ノ半分ヲモ為サシメ玉ハラン事ヲ。

以上が、1900年10月22日付、松村から川瀬演習林長あて照会の全文である。翌11月2日付、松村は回答の督促状を送っているが^{HM33/11/02[ナシ]}、行き違いに林長から、同日付、以下の返事が届いた。

『川瀬演習林長→山村書記』^{HM33/11/02[ナシ]}

本年度ヨリ三十四年度ニ互ル演習林事業豫定

い第一号 経理

経理事業ハ豫定ノ通り、井ノ川十三ヶ沢ヲ一區トスル事ハ、右田助教授ニ於テモ至極賛成ナリ。依而郷台畑ニ山小屋建設モ差支ナシ。

い第二号 造林

造林ニ付テハ別紙本多教授ノ意見モ有之、不取敢大仙場ノミヲ本年度ニ植付ケマデ終了スル事ニ為シ、清澄モ御申越之通り造林シ、郷台畑モ御意見乃通り、其他ハ冬期本多教授出張ノ節、其意見ヲ聞キテ着手相成可然ト存候。

〔別紙〕 造林 本多静六

1 項

大仙場ハ本年四月巡視セシ所ニテ異議ナシ。

四郎治澤ハ小生未ダ詳知セザル所故、賛否ヲナシ難キモ、本年四月巡視ノ折ニハ、郷台畑ノ西部一帯ノ禿伐跡地ヲ造林スル如ク相談セシヤニ覺居リシガ如何ヤ。餘リ飛離レズニ可成大クスル事無ク造林ノ事可然存候。然シ四郎治澤モ爾後毎年ツバイテ伐木シ、且其跡地ガ造林ニ適スル所ナレバ差支ナシ。

従来ノ経験ニヨレバ地拵ハ遅レ勝ニナルモノ故、地拵ノ事業ハ可成早ク着手シ、遅クモ二月中ニ終ル様致度事。殊ニ清澄ノ如キ茅生地ハ、可成本年内ニ地拵ヲ終リ、刈リタル草茅等ヲ十分ニ落チ付カシムル如ク致度事。

其他ノ案件ハ異存ナキモ、只三十四年度ノ造林費ノ全部若クハ大部ヲ三十四年ノ春ニ消費スルトキハ、其後ノ下刈、手入、其他三十四年度冬ノ地拵（三十五年度ノ造林ノ為メ）、殊ニ種々ノ伐採等ノ費用ニ差支困難ヲ生ズル事アルト存候。其費用ヲ多分ニ残シ置ケバ、冬季前二三十五年春ノ造林ニ向ケル故、毫モ差支ナシ。此点ハ従来ノ経験ヨリ御注意申上置候。

2 項

造林試験地ハ余リ小面積デ狭長ノ形トモ考ラル、ガ、何反歩程アルヤ。大体ノ面積形状等承知シタシ。

尚出張ノ折ニ相談可致モ、試験ノ方案ハ一應承知致度事。

3 項

竹林ヲ仕立ツル事賛成。只、土地ガ西北向ニアラズヤ。竹ハ可成南又ハ東向ノ所ガ宜シト考フ。若シ余リ北向デ寒風ノ当ル所デサエナケレバ賛成。又竹ノ移植ハ六月頃梅雨中ト考ヘラルルガ、今回ノ費目六十円ハ地拵ノ費用ノミナルヤ。多分然リト存候。

4 項

郷台畑開墾ノ件異議ナシ。可成早く着手ヲ望ム。床替ノ前ニ当リテ開墾スル如キハ抑々拙ナリ。

い第三号 林政之件

田圃近接地ヲ秣草刈取場トナスノ件ハ、至極必要ト考ヘ得ルモ、無料借地トセバ法規ニ抵触スル嫌有リシ間、右ハ刈取ノ申出ヲ為サシメ、之ニ向テ派出所ヨリ防火線刈取ヲ命ズルコトニ致シ度シ。又、雑木林ノ仕立ヲ為シ能ハザル箇所ニ、棕櫚及枳殻等造林ノ儀ハ今一應御一考相成度シ。

い第四号 境界査定ノ件

右ハ御意見之通、御施行相成度、且ツ折木沢ノ方ノ番号ハ別ニ壹号ヨリ始メ、萬一将来差支ヲ生ジタルトキハ変更スル事ニ致シ可然ト存候。

い第五号 測量ノ件

右ハ御意見之通、御実行相成可然候。

い第六号 官行事業ノ件

右ハ御申越ノ通、実行スル豫定ニテ御準備相成可然ト存候。尤モ鉄條運材及鋸器械之件ニ付テハ、貴官親シク右等ノ装置ヲ実行セル地方ニ至リ、一應実況御調査之上、着手相成ル様致度候。

以上、前世紀最後の年に松村が提案、本演とのあいだで検討された、今世紀初頭の運営計画を紹介した。派出所設置後間もない時代の千演の状況がうかがえる。

千演の面積は、すでに現在に近いが、特にあとから編入された奥山方面には、民有地との境界未決定の部分が多かった。境界確定は急務であったが、地元の理解が重要で、話し合いに時間のかかる場合も予想されている。ときには池の沢・小屋の沢官林と西原民林の境界のように裁判となる例もあった^{CM33/01/09, CM34/06/17}。なお、民有農地に接した林地では、日陰を与えないような施業法が検討されている。

奥山方面では、演習林運営の基礎資料となる地形図の完成や、林況調査が急がれた。学生・生徒の実習としての実行が進められている。

直営による素材や製材の生産が、熱っぽく提案されている。目的の第一は、予算獲得の裏付けとなる収入増であろうが、同時に他の模範になるような事業を意図した。また、養魚や製炭などの試験開始に向けての準備が行われた。

人工造林では、苗木の自家生産のために、郷台苗畑の拡張整備が検討され、植栽苗活着試験も計画された。この時代の造林地は、現在すでに伐採された林分が多いが、大仙場のスギ林、足谷のヒノキ林などは、なお残っている。

演習林創建の意欲あふれる松村の提案を、本演は、ほぼ原案どおり認めた。ただし、運材、造材については、甘さを感じてか、慎重さを求めている。また、本多の回答は、失敗を重ねながら、千演初期の造林を指導、実践した者ならではの助言であろう。

千演沿革史資料(1)は、創設(1894年)から第一次経営案開始(1905年)までの期間を『創草期』と区分している¹⁾。1898年の派出所設置、松村の着任によって、創草期後半には演習林の運営が急速に軌道に乗る。百年史で前半を『創設期』、後半を『整備期』とした所以である²⁾。

なお、上記の文書が往復した1900年当時の千演常勤者は以下のようなのである。職責の程度を知る参考までに、同年末の賞与額を括弧内にしめす。助手、松村繁朶(25円)、書記、山村鍋吉(25円)、雇、池田儀宗(14円)、雇、菱田吉也(8円)、定夫、島野徳次郎(10円20銭)、定夫、地引貞次郎(9円50銭)、定夫、須永祐松(6円30銭)。

千演初代の主任を務めた松村繁朶氏は高知県出身、1871/M4年生、1898/M31年林学乙科を卒業、同年助手に任命され千演に着任した。1909/M42年本演へ転出、1913/T2年朝鮮江原道演習林主任へ転出、1925/T14年行政整理により退職。清澄寄宿舍芳名録に1966/S41年6月、繁朶氏未亡人ほか血縁者来演時の記帳がある。

引用文献

- 1) 演習林研究部・千葉演習林(1974): 千葉演習林沿革史資料(1), 演習林 **18**:9-28
- 2) 島田錦藏(1944): 清澄部落の研究—演習林地元部落の研究—, 57p., 東大演, 東京
- 3) Anon.(1994): 千葉演習林, 演習林 **32**(東大演 100周年記念): 9-35